

聖書：I サムエル 7：1～17

説教題：ここまで主が助けてくださった

日時：2015年12月27日（夕拝）

この章でイスラエルは新しい歩みへ導かれます。これまでの4～6章では良いことが何もありませんでした。イスラエルはペリシテ人に敗れ、主の契約の箱を奪われてしまいました。「栄光がイスラエルから去った」と言われるような状態に落ちてしまいました。その後、主の契約の箱はイスラエルに戻って来ますが、これを軽率に迎え入れたベテ・シェメシュの人々が激しく打たれます。彼らは喪に服して、キルヤテ・エアリムに主の箱を運びました。そんなイスラエルに新しい導きが与えられます。きっかけは何だったでしょう。それはイスラエルの「悔い改め」でした。彼らはサムエルを通してこのことへ導かれます。

それにしてもこれがなされるまでには相当時間がかかったようです。2節：「その箱がキルヤテ・エアリムにとどまった日から長い年月がたって、二十年になった。イスラエルの全家は主を慕い求めていた。」欄外には別訳として「主を求めて嘆いていた。」とあります。イスラエルは6章最後の部分で主に打たれ、喪に服しましたが、何とそれに引き続き20年もの月日が経過していたのです。彼らはその中で苦しみあえぎ、ついに主を求めて叫ぶ状態になっていました。それにしても時間がかかり過ぎです。主の名を呼ぶまでこのような年月を要したのです。またこれは主の忍耐をも現しているでしょう。これだけの苦しみに会いながら、すぐに悟らない彼らに主はイライラせず、こんなにも長きに渡り、ふさわしい時が来るまで待つて下さったのです。そして20年が経過したこの時、サムエルが舞台に戻って来ます。彼はイスラエルが新しい歩みへ踏み出すための言葉をこのように語ります。3節：「そのころ、サムエルはイスラエルの全家に次のように言った。『もし、あなたがたが心を尽くして主に帰り、あなたがたの間から外国の神々やアシュタロテを取り除き、心を主に向け、主にのみ仕えるなら、主はあなたがたをペリシテ人の手から救い出されます。』」

ここにイスラエルの中に偶像礼拝の罪があったことが明らかにされています。彼

らは何とバアルやアシュタロテといったカナン人の偶像の神々を隠し持っていました。この罪こそ、彼らを主の祝福から遠ざけ、嘆きの生活に追いやっていた真の原因でした。この偶像礼拝は神が最も嫌われる罪の一つです。十戒の第一戒は「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」です。またイエス様も律法を要約して、第一の戒めは「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」であると言われました。この根本的な戒めを彼らは犯しつつ、平気で過ごしていたのです。そのような彼らに神の祝福が注がれるはずがありません。彼らに必要なのはまず悔い改めでした。単に心で悲しく感じ、後悔するだけでなく、生活の方向転換をすることです。ふさわしくないものを自分の生活から取り除くこと。そして真心から主に信頼し、主にこそ仕える歩みへと進むことです。

今日の私たちはどうでしょうか。私たちは目に見える偶像の神々を隠し持っていないでしょう。しかし主に第一に従うことを妨げ、引き止めるもの、心の中で神のライバルになり得るものはみな偶像です。果たして私たちは神が喜ばれないと分かっているものを隠し持っていることはないでしょうか。あるいは主が喜ばない生活や習慣を自らに許し、放置していないでしょうか。あるいは主にではなく、お金や目に見える人間関係に信頼を置き、主を軽んじてはいないでしょうか。これらの問題を保ったままでは主からの祝福はないのです。なすべきことは自らを振り返り、御前にふさわしくないものを取り除くこと。それを行なう時に、主にこそ信頼し従う者に与えられるすがすがしい喜びと幸いを取り戻すのです。イスラエルは6節でミツパに集まり、断食し、「私たちは主に対して罪を犯しました。」と告白しました。ここからイスラエルの新しい歩みが始まります。あわれみに富む主は、このように悔い改める彼らを、また私たちを赦して下さり、ご自身との新しい関係から来る豊かな祝福の中に生かして下さいます。

では、その彼らにどんな祝福が臨んだのでしょうか。続く記事を読んで興味深いことは、悔い改めたらすぐに祝福が来たわけでないということです。まず起こったことは、7節にあるように、ペリシテ人が再び攻めて来たことです！イスラエル人は悔い改めのために集まったのですが、ペリシテ人はイスラエルが戦いのために集ま

ったものと早合点し、襲い掛かってきます。思わぬ展開です。悔い改めたら、かえって悪いことが起こって来た。しかしそれはおそらくテストなのでしょう。本当に彼らは悔い改めたのかどうかを試されるための。イスラエルはここで以前のように神の箱を運んで来たり、今捨てたばかりのバアルやアシュタロテに頼ろうとはしていません。彼らは8節で一層主に頼ります。それを受けてサムエルが全焼のいけにえをささげます。ところがまた予想外の事態となります。サムエルがまだいけにえをささげている最中に、ペリシテ人がやって来てしまいました。こちらは戦う準備などできておらず、今、お祈りしているところです。せめてこのお祈りが終わってから来てくれれば良いのに。タイミングが非常に悪い！しかしこの絶体絶命の大ピンチにおいて、主のみわざが起こります。10節～11節：「サムエルが全焼のいけにえをささげていたとき、ペリシテ人がイスラエルと戦おうとして近づいて来たが、主はその日、ペリシテ人の上に、大きな雷鳴をとどろかせ、彼らをかき乱したので、彼らはイスラエル人に打ち負かされた。イスラエルの人々は、ミツパから出て、ペリシテ人を追い、彼らを打って、ベテ・カルの下にまで行った。」この記録を良く見て下さい。イスラエルはなぜ勝てたでしょう。それは主が大きな雷鳴をとどろかせて、ペリシテ人をかき乱して下さったからです。いつそのことが起きたでしょう。イスラエルが戦い始める前でした！つまりイスラエルがまだ何もしていない内に、すでにペリシテ人の敗北が決定的になっている。イスラエルはあとは追いかけて行くだけです。これは旧約聖書で繰り返し言われていたことです。レビ記 26章 8節：「あなたがたの五人は百人を追いかけ、あなたがたの百人は万人を追いかけ、あなたがたの敵はあなたがたの前に剣によって倒れる。」また申命記 28章 7節：「主は、あなたに立ち向かって来る敵を、あなたの前で敗走させる。彼らは、一つの道からあなたを攻撃し、あなたの前から七つの道に逃げ去ろう。」主が私たちと共にいて、私たちの味方に付いて下さると、このようなことが目の前で展開する。こちらはまだ何もしていないのに、敵が勝手に逃げ去っていくという事態が起きる。ですから大切なことは人間の知恵に頼ることではなく、主に従うことなのです。主との正しい関係に生きるなら、主は私たちには考えられないような方法で道を開き、私たちを祝福に生かしてくださるのです。

12節でサムエルは一つの石を取り、エベン・エゼルという名を付けました。そ

して「ここまで主が私たちを助けてくださった」と言いました。似たエピソードとしてヨシュア記4章の出来事が思い起こされます。ヨシュアはヨルダン川を渡り終えた後、川の真ん中から12の石を取り、それをギルガルに立てて記念としました。そのように主の恵みを心に刻み、主に感謝することは良いことです。しかしサムエルのこの言葉を見て分かることは、彼は今回主が与えてくださった勝利だけを考えていたのではないということです。「ここまで主が私たちを助けてくださった」という言い方は、もっと長期間に渡る主の助けについて述べた言葉でしょう。おそらくサムエルはアブラハムから始まるイスラエルの全歴史を意識していたと思われる。そして特に今夕、心に留めたいことは、彼はここで単にいくつかの人間の目に良いと思われる出来事だけを指して、主は助けてくださったと言っているのではないということです。「ここまで助けてくださった」は、主の絶えざる継続的な導きについて語った言葉でしょう。人間の目に良いと思えた事柄ばかりでなく、そうでない出来事も含めて。

少し具体的に言えば、4～6章では人間の目に良いと思われることは何もありませんでした。イスラエルはペリシテ人に敗北し、神の箱は持ち去られ、厳しい状況に置かれました。果たしてここにも主の助けはあったと言うべきでしょうか。イスラエルはその中で自分自身を知るように導かれました。自分たちの罪を知るように導かれました。罪の結果としての苦い実を味わうように導かれました。罪は何を刈り取るかを学ばされました。これらの言わば懲らしめの期間を経てこそ、この時のイスラエルはあったのです。ですから暗くてどこにも光が見えないような日々を過ごした中にも、主の助けはあったのです。そして彼がこの記念碑を建てたのは、これからも益々この主に信頼するためでしょう。ここまで助け導いてくださった神は、これからも私たちを助け導いてくださる。そのように主にこそ信頼を置いて、イスラエルが力強く歩むためでしょう。

13～14節には今回の勝利に伴う三つの祝福が記されています。一つはペリシテ人がイスラエルの領内に入って来なくなったということ。二つ目はペリシテ人がイスラエルから奪った町々がイスラエルに戻ったこと。そして三つ目はイスラエルはペリシテ人の手から領土を解放したばかりでなく、エモリ人との間にも平和があっ

たということです。

最後の 15～17 節にはサムエルの継続した働きが記されています。この章における彼の働きはエキサイティングなものでしたが、それだけが重要なのではなく、普段の地道な宣教活動・巡回活動もそれに劣らず重要です。サムエルが主の預言者としてそのように大切な働きを続けたことがここに記されています。

以上の I サムエル記 7 章。私たちは 2015 年最後の聖日礼拝をささげるにあたり、今日与えられた御言葉をより良く心に留めることができるのではないのでしょうか。今年の歩みを振り返る時、そこには色々なことがあったことでしょう。絶望した時、落胆した時、主の光が見えないような中で苦しみうめいた日々もあったでしょう。しかし主はそれら全てにおいて私たちを助けて下さっていたのであり、その実りとして今日、私たちはこのように神を仰ぎ、礼拝する恵みの中に立たせていただいているのではないのでしょうか。イザヤ書 63 章 9 節：「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」 私たちの至らなさのゆえに、あるいは罪のために、暗い日々を過ごした時も、主は常に私たちをこの年も抱いて背負って来て下さった。そしてこの日まで私たちを助けてくださった。私たちはその主を仰いで、すべての栄光を御名にささげたいと思います。そしてこのお方の真実の前で、もう一度自らを点検したい。主の喜ばないものを残したままにしているか。悔い改めなければならない態度や考え方はないか。それらを整理しつつ、ここまで助けてくださった主が来たる年も私たちを助けてくださることを信頼して、主に従い、主によって導かれて行く新年の歩みへと進みたく思います。